

政宗騎馬像余話

小室達・日記から



▷ 5

分埋られ俗
鑑札に金が
入れ始めれ
た。地金百
六貫、七百七
十二貫、砲金
四十九貫、百
八十四貫、古
鏡五百、十九
貫、金計百
六十貫(九百
七十五)。

原型鑄造

昭和十年一月二十日、伊藤鑄造所の家は傍いで、
伊藤宗騎馬像の制作が、
小室達は、感情の帯まま
まはと好しるまじ筆致
まの日の日記をつつ、
た。
「伊藤君(東京・日暮里、
伊藤鑄造所)の家は傍いで、
と汽車が通るたびごと
地盤かと思われるため安眠
できぬ、七時起床し、午前
中今日の歴史的な鑄造への
段取りを見ます。すべての
準備はでき、型は地面に平

型は、ついで銅像としてそ
の威容を現した。政宗の靈
を慰めるため古い鏡も浴
かし込む。きめの細やかな
心配りをしている。
旧制白中での小室の後輩
に当たる雄雄(毛)元中
は、いよいよ最後の流し込
みである。各自死の覚悟
と感激が見える。一つの過
失なく無事終る。上成鏡
らしい。渠がたぞうでたま
らなかつた」
小室が支通りに寝食を忘
れ、政宗をかかへとまで
呼ばれながら立ち上げた原
型は、ついで銅像としてそ
の威容を現した。政宗の靈
を慰めるため古い鏡も浴
かし込む。きめの細やかな
心配りをしている。
旧制白中での小室の後輩
に当たる雄雄(毛)元中
は、いよいよ最後の流し込
みである。各自死の覚悟
と感激が見える。一つの過
失なく無事終る。上成鏡
らしい。渠がたぞうでたま
らなかつた」

「小室さん、銅像の
鑄物会館の研究も東北学
の金属材料研究所の先方
に指導を受け
ました。私の
造った政宗公
の銅像が風化
したり、こびり、はげた
りして、これが小室の作か
と、千代の年月を経たもの
人々から愛されないよに
ねと私の鑄をのぞきまじ
まじして、にんまりほ
ほえしたのであつた。小室



騎馬像の原型は今、柴田公民館にもある。天守台の像とは違ふ。なごんから見たとができ興味深

学校長・岩沼元任住しは
「彫刻家小室達氏を思つ
と題した文章の中で、小室
が話しつれたというう
ソドを紹介しては、
「小室さんは、銅像の
鑄物会館の研究も東北学
の金属材料研究所の先方
に指導を受け
ました。私の
造った政宗公
の銅像が風化
したり、こびり、はげた
りして、これが小室の作か
と、千代の年月を経たもの
人々から愛されないよに
ねと私の鑄をのぞきまじ
まじして、にんまりほ
ほえしたのであつた。小室

慰霊に古鏡19キ口

れ、覆顔銅像を拜した際、
ちようどい合せて光バ
スのガイドが間違つた説明
をしていた。像は政宗公三
十六歳、親の仇(かたき)
を打つた当時を模したも
だ」といふのである。腹を
立てた小室は河北新報のこ

心は一千年後のことを考え
ているのだな感、私の
心深くこの墓が刻み込
まれている
◇

ここで、懐いていての説
明をしておこう。後年、小
室が久しぶりに仙台を訪
そう。
慶長八年(二六〇三年)
公卿年二十七歳、十五年間
の思ひ出のへき地、岩出山
屋敷より、かねて築城中の
青葉ヶ崎に移り住むことな
る。当時の地名、千代を
仙台と改め入府せられ、じ
来、年を凌(お)うて大仙
台の基を拓かれたのであ
る。
雄心勃々(ぼつぼ)思
いを遠く南側に馳する英傑
が治内の平和的施設を胸深
く感しながら運(は)る。か
太平洋を脚腕(こ)にけし、
悠揚(ゆうよう)の手馬(うま)豊かに
英姿(えいそ)躍(た)る。そこと青
葉城に入城せられたのであ
る。
武人政宗公の面目は一
転、名將として千載青史に
烈するの偉人となられるの
第一歩(いさ)ここ印せられた
ので、当時の御英姿(ごえいそ)を正
に千代(ちよ)に合(あ)へき好箇(こうかん)
の題材(たいざい)と思惟(しゆい)し、
「あやま」
なきを萌(も)したのである。英
姿(えいそ)から来る自然の勢威(せいゐ)、
駿(うま)馬(ば)の脚中(けいちゆう)動(どう)をばらひ
びらき、
馬(うま)の脚中(けいちゆう)動(どう)をばらひ
びらき、
馬(うま)の脚中(けいちゆう)動(どう)をばらひ
びらき、

三十七歳の政宗の雄姿を
つくり上げた時、小室もま
た期(き)まして三十七歳(さんじゅうしちさい)か
た(敬称略)